

# 7.

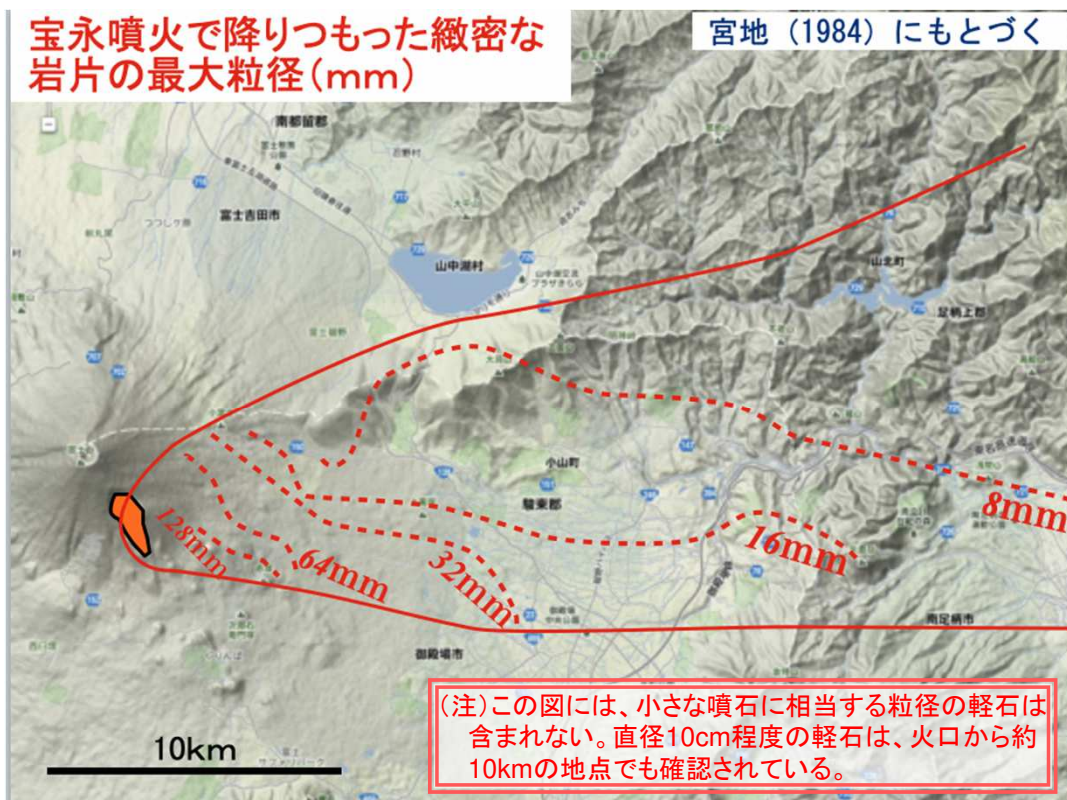
降灰（小さな噴石を含む）及び降灰後土石流の  
ハザードマップについて

# 7. 小さな噴石の実績図ならびに降下範囲の予測例

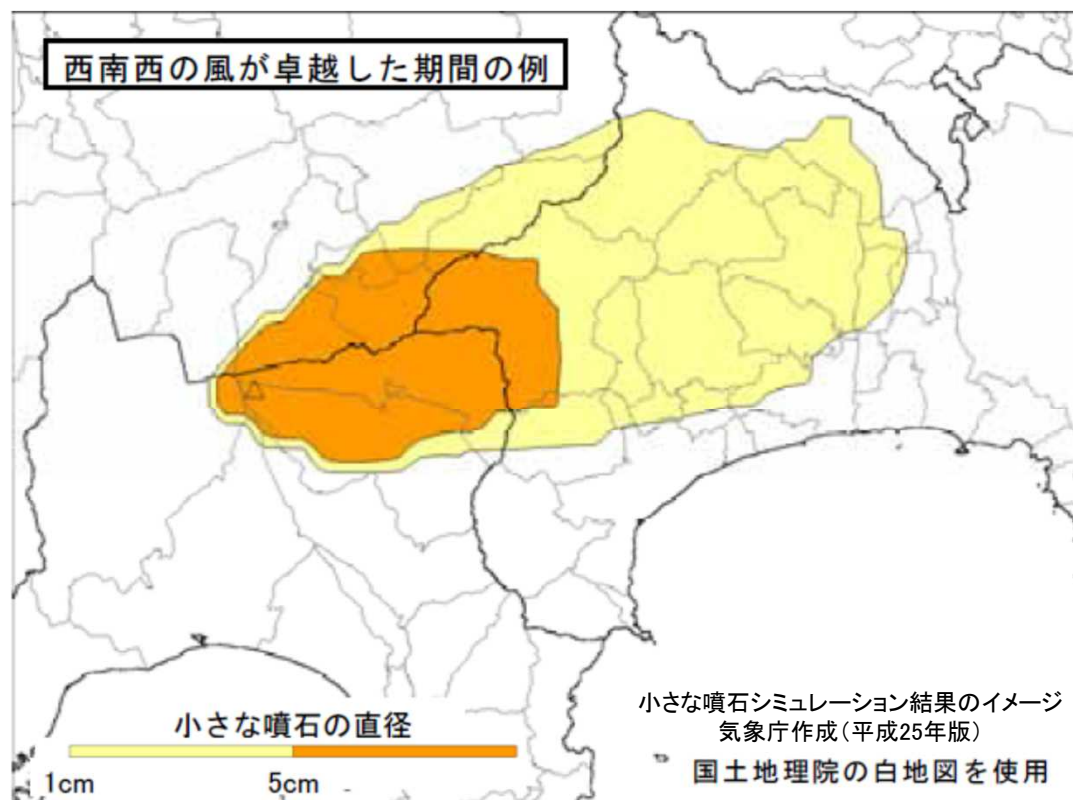
point

- 宝永噴火の実績では、上空の強い西風に乗って、火口から20kmほど離れた場所へ直径2cm程度の小さな噴石（緻密な岩片）が落下している。
- 風下では、大きな噴石の可能性マップ以外でも、気象庁の降灰予報（小さな噴石も対象）によって小さな噴石の飛散が予想された地域では、丈夫な建物内に留まるなど注意が必要であることを、実績図ならびに降下予想範囲図を例として示す。

宝永噴火で降りつもった緻密な岩片の最大粒径(mm)



宝永噴火の初期(ステージ I)に降り積もった小さな噴石(緻密な岩片)の最大粒径の実績図(宮地(1984)に基づく)



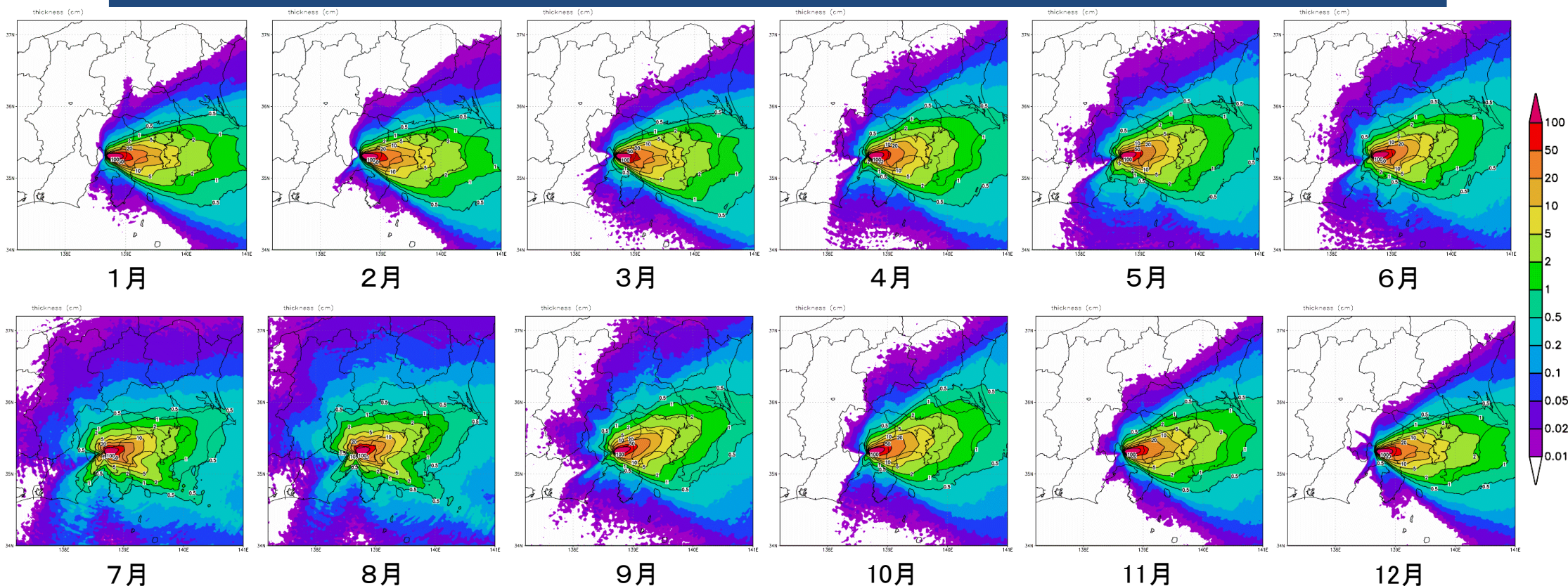
小さな噴石の降下予想範囲(例)

※ 宝永火口で宝永規模の噴火（噴煙高度、噴火期間（2週間））が発生した場合のシミュレーション結果（図は西南西の風が卓越した期間」の例）。富士山火山広域避難計画（平成31年3月）より抜粋。



# 7. 降灰（小さな噴石を含む）のドリルマップ

○ 降灰については、本検討委員会では新たなシミュレーション等を行っていないため平成16年富士山ハザードマップ検討委員会報告書に記載されたドリルマップを再掲する。



降灰のドリルマップ(1月～12月)

(平成16年富士山ハザードマップ検討委員会報告書から再掲)

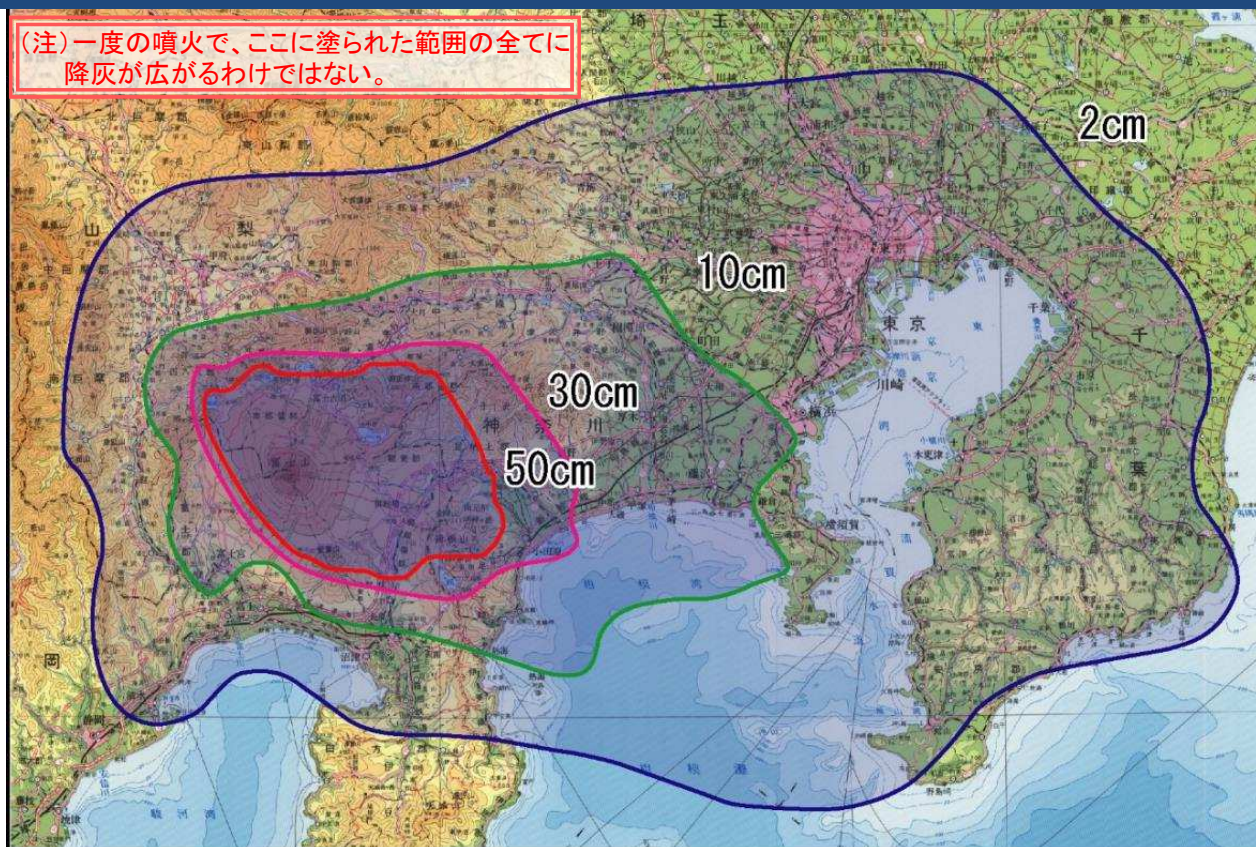
## 作成手法

- 噴火による降灰分布（地点ごとの堆積厚）を示す降灰のドリルマップは、富士山山頂で噴火が発生した場合を想定し、噴煙柱の形成過程として（鈴木（1985））によるモデル化と、火山灰の拡散・降下過程を大気中の粒子の三次元的な運動とする移流・拡散モデルによるシミュレーション（気象庁・気象研究所が開発）により作成されている。
- その際、想定規模は宝永噴火実績と同規模の7億 $m^3$ とし、過去45年間(1957～2001)の富士山上空約1万mの風向風速の解析データを用いて、富士山上空の風の風向・風速の出現頻度の統計値を用いて、月ごとにシミュレーションを行っている。



# 7. 降灰（小さな噴石を含む）の可能性マップ

- 降灰については、本検討委員会では新たなシミュレーション等を行っていないため平成16年富士山ハザードマップ検討委員会報告書に記載された可能性マップを再掲する。



降灰の可能性マップ

(平成16年富士山ハザードマップ検討委員会報告書から再掲)

## 作成手法

- 富士山山頂で宝永規模の噴火が発生した場合の月別降灰分布図（ドリルマップ）を12ヶ月分重ね合わせ、各地点で最も厚く堆積しているドリルマップの降灰堆積深をその地点の降灰堆積深とし、降灰分付図を作成している（厚さの区分けは2cm、10cm、30cm、50cm）。
- また噴火は富士山山頂だけではなく想定火口範囲で発生する可能性があるため、上記降灰分布図を平成16年富士山ハザードマップ検討委員会報告書時点での大規模噴火火口分布領域に沿って平行にスライドさせ、それらを包括した降灰分布図を作成している。